

薄暗い庭に出て 縁側に座り、いつときじいつと、東の空を見ていた。そうすると、空が赤

く染まってきた。間もなく山の上にお日様が 徐々に顔を覗かせた。雲も無く、煌煌とお日様

は昇ってきた。その光景を見た吾助爺さんは、ガクンと首を垂れた。

「お婆さんや、今日は、雨は降らんでしょう。」

そう言葉を吐き捨てるように言うて、また寢床に入ってしまった。

また次の朝、吾助爺さんは、きのうと同じ時刻に目を覚まし、

きのうと同じように縁側に腰を下ろし、東の山を瞬きもせず見詰めた。

やがて 日が昇り、東の空は 曙色に染まった。それを見た吾助爺さんは、怒った声で言うた。

「おうい、お婆さんや、やっぱり竜王さんじゃだめだ。」



そいじゃけえ、わしがいう雷かみなりさんや稲妻いなづまさんに頼たのまんによつまらん。そう、わしがいうとるんじゃ。ほんまにみんな、わしの言う事ことがわかつとらん。」

奥おくの部屋へやで石臼いしうすをひいていたお婆ばあさんが、吾助ごすけじい爺やさんの声こえを聞いて、縁側えんがわに近寄ちかよつて来て

言ゆうた。

「竜王りゅうおうさんいそがも忙しいんじやろう。この前まえ頼たのまれたばかりじゃけえ。きつとそうよ。なん

ぽ竜王りゅうおうさんいそがじやいうても、そがいにはようはできやあせんわいのう。」

それを聞いた吾助ごすけじい爺やさんは言ゆうた。

「そりゃあ、そうかもしれんが、はよう雨あめが降ふってくれんにや、わしら今年ことしの冬ふゆは飯ままがくえんでえ。」

お婆^{ばあ}さんは、吾助^{ごすけじい}爺^{じい}さんをなだめるように、にこにこ笑^えみを浮^うかべながら言^ゆうた。

「まあ そういわんと、名主^{なぬし}さんも、この度^{たび}は骨^{ほね}をおりんさった。

そうじゃけえ、あんたも、もう少^{すこ}し気^きなごう

竜王^{りゅうおう}さんを信^{しん}じんさいや。」

また、次^{つぎ}の朝^{あさ}がやつてきた。吾助^{ごすけじい}爺^{じい}さんはどうした訳^{わけ}か、

寢^ね床^{どこ}から起^おきてこんかった。

お婆^{ばあ}さんは、炊事^{すいじば}場^ばから、大^{おお}きな声^{こえ}で吾助^{ごすけじい}爺^{じい}さんに向^{むか}っておらんだ。

「何時^{いつ}まで寢^ねとるんかのう、はよう起^おきんにやあ。お天^{てん}とうさんは、とうに昇^{のぼ}つとりますでえ。」



吾助爺さんはお婆さんに叱られ、無理やり起こされた。

「やれ、やれ、のう。」と、吾助爺さんは、ため息を

つきながら、大きなあくびをし、縁側に出て、

腰を下ろした。

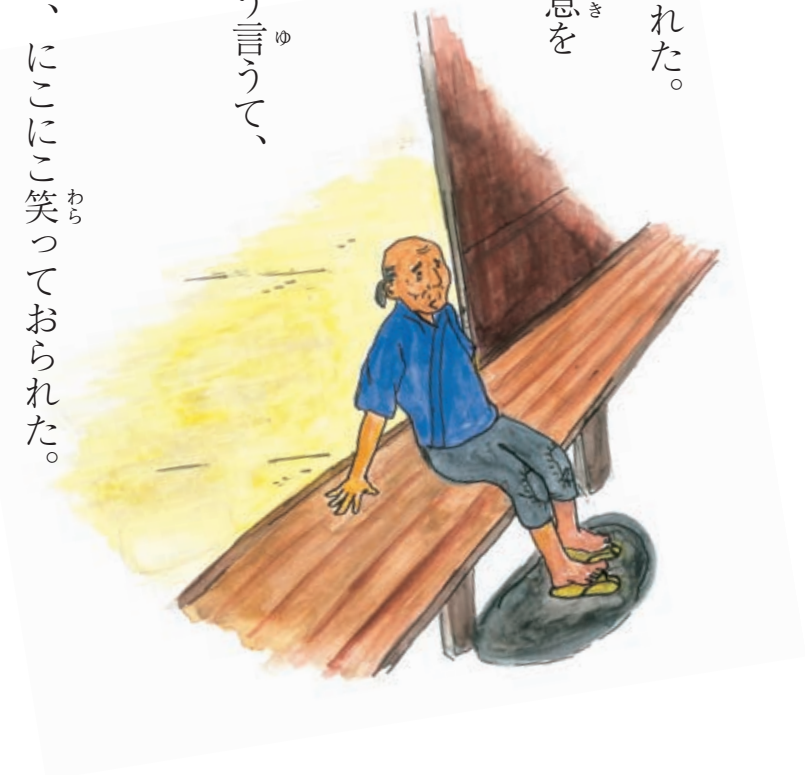
「今日も天気がええのう、雨は降らんのう。」そう言うて、

吾助爺さんは、恨めしげにお日様を見上げた。

すると、お日様が、吾助爺さんを見下ろしながら、にこにこ笑っておられた。

吾助爺さんは、不思議に思って、慌てて目をこすつて、改めてお日様を見ると、薄い雲に

隠れておられた。





「どうということかの。」

お婆さんは、針仕事の手を止めて言うた。

「お爺さん、何を言うとりん。まだ寝惚けとりんかいのう。」

そういうながらも縁側に出て来て、ゆつくりとお日様を見上げた。

「まこと、お天とうさん、笑っておられるのう。」お婆さんは驚きもせず、続けてこう言うた。

「今、竜王さんとお天とうさんは、相談が終わったんじやろう。ほいで…。お天とうさんが、

吾助爺さんは、やっぱりと、先ほどは目の錯覚だったのだと思って

いると、雲の隙間からお日様がまた、にこにこ笑って出てこられた。

吾助爺さんは、それを見定めると、大きな声で叫んだ。

「お婆さん お婆さん。お天とうさんが、わしを見て笑っておられる。

分わかつた分わかつた言ゆうて、笑わらうておられるのじゃ。」

お婆ばあさんのいうことを、不思議ふしぎに思おもった吾助爺ごすけじいさんは、

「何なんでおまえ、そんなことがわかるんじゃ。」すると、お婆ばあさんは空そらを指ゆび差さして言ゆうた。

「それ、見みてみんない。入道雲にゅうどうぐもがむくむく動うごいているじゃろう。あの入道雲にゅうどうぐもの中に竜王なか りゅうおうさ

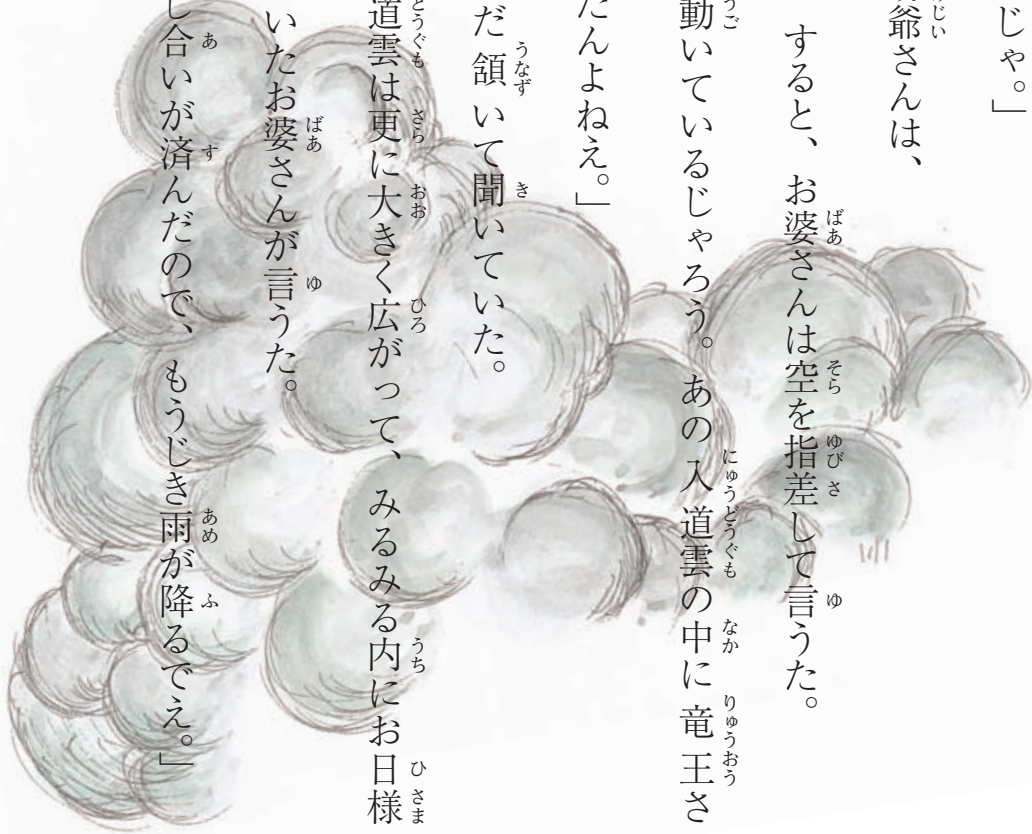
んがおりんさつてのう、ほいで、話はなしがついたんよねえ。」

吾助爺ごすけじいさんは、半信半疑はんしんはんぎであつたが、ただただ領うなずいて聞きいていた。

ふたりのやり取りとが続つづく中なか、先ほどの入道雲にゅうどうぐもは更に大きく広ひろがって、みるみる内うちにお日様ひさま

を、すべて包つつみ込んでしまった。それを見みていたお婆ばあさんが言ゆうた。

「お爺じいさん、竜王りゅうおうさんとお天てんとうさんの話はなし合あいが済すんだので、もうじき雨あめが降ふるでえ。」



お婆さんばあが、予言よげんしたようにしだいに空そらは、黒い雲くろくもにおおわれてきた。

そんな様子ようすを眺めながていた吾助爺ごすけじいさんは、「ほんまじゃ、こりやあ雨が降あめふるでえ。」

と、胸むねをわくわくさせながら、今いまか今いまかと待まっていると、西にしの空そらに稲妻いなずまが走はしった。

間髪かんぱつ入れず、

「ゴロゴロ　ゴロゴロ。」

と、雷鳴らいめいが轟とどろいた。その音おとが、消きえるか消きえないか、まさしゅんかんにその瞬間、

「ザー。」

と、大粒おおつぶの雨あめが降ふって来きた。吾助爺ごすけじいさんは喜よろこびのあまり裸足はだしで、大雨おおあめの中なか、庭にわに飛とび出だした。

「お婆さんばあ　お婆さんばあ、雨あめじゃ　雨あめじゃ、雨あめが降ふってきたでえ。」

大きな声おおこえで、何度なんども何度なんども、叫さけんだ。

そして、りようほう両方の手のひらを天てんに向けて

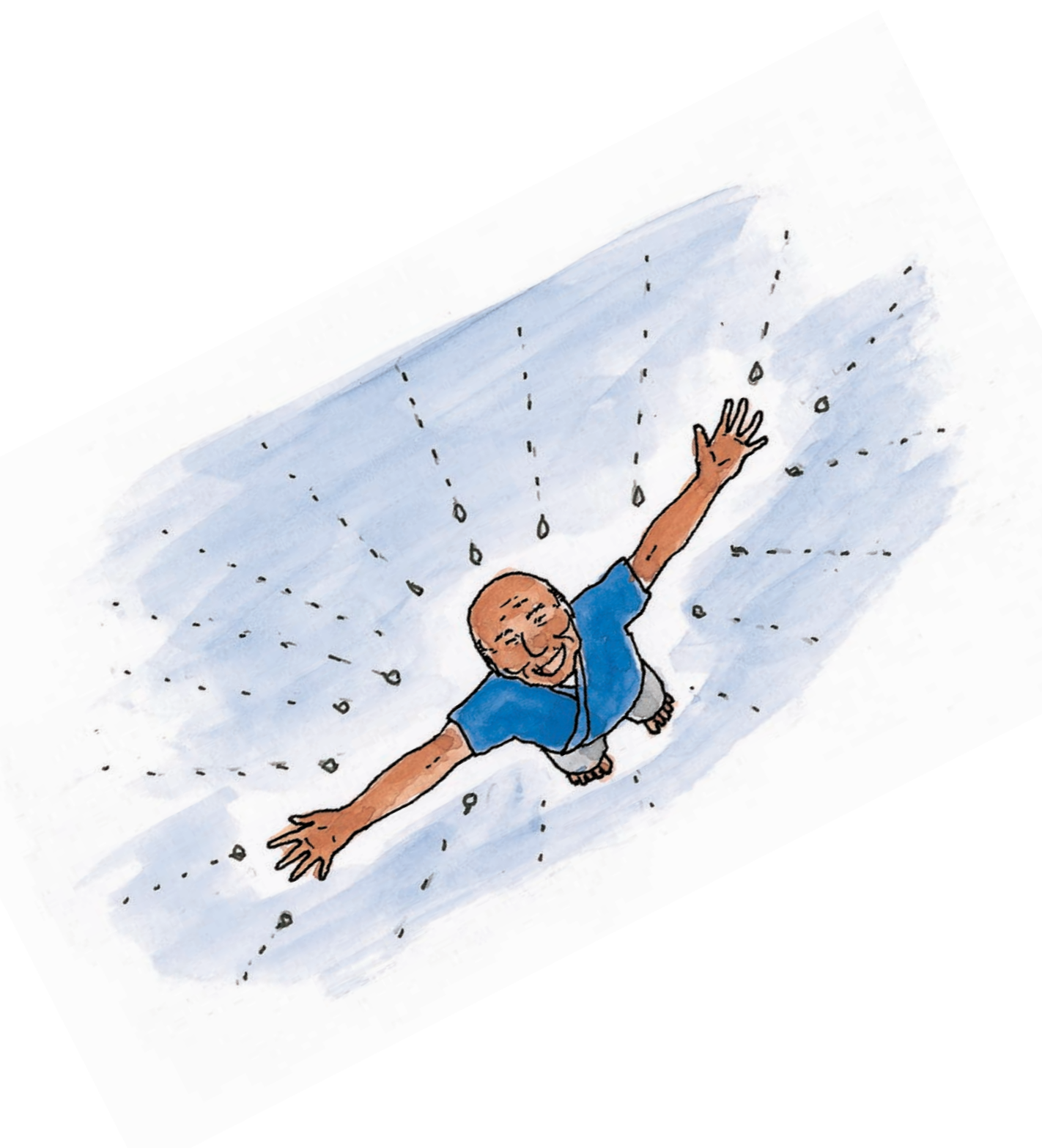
あめ雨の感かん触しよくを確たしかめ、子こ供どものようにはしやいだ。

吾ご助すけ爺じいさんは我われに返かえり、降ふりしきる雨あめの中なかで、

にし西の竜王りゅうおうさんのお社やしろに向むかって、りようて両手あを合あわせた。

「竜王りゅうおうさん、有あり難がとうあります。ほんまに有あり難がとうあります。」

そう、なんど何なんど度も何なんど度も、感かん謝しゃの言こと葉ばを呟つぶやき続つづけましたげな。



へんしゅう お 編集を終えて

貴船神社は昔から当地では、俗に竜王社・竜神社・竜王さん などと言われており、

この度は、昔話として、「竜王さん」を使わせて頂きました。

雨ごい神事は事実として、日照りが続き水飢饉の時に、古くから保井田、倉重、千同、坪井、三宅の五か村の人々が、行っていた行事です。

最近、行われたのは明治四十五年執行され、そのときは、三日以内に雨が降った記録があると伝えられています。しかし、昭和十四年の水飢饉にはどうした訳か効果が現れなかったと記録されています。現在は、竜神二の釜のご神体の青石が、大水で残念ながら流されて無くなってしまったとのことで、今後この行事は施行される事は出来なくなっています。

この作品は史実を基に一部創作したものです。



き ふねじんじや りゅうおう
貴船神社「竜王社」

りゅうじんかま に かま
竜神釜「二の釜」

じ ごくだに りゅうじんだに い たに たき みつ じょうりゅう
地獄谷とか 竜神谷とか言われる谷に 滝つぽが三つある。上流
から じゅん いち かま に かま さん かま なまえ いち かま
順に一の釜・二の釜・三の釜と名前がついている。一の釜は
ひ かま
火の釜で、この釜は かんやうどう すこ のぼ ところ たに おり ところ
山陽道を少し登った所から谷に降りた所に
あるが、この釜に行く道はない。二の釜は水の釜で、この釜はゴル
カマ い みち カマ みず カマ カマ
フ場の上部西側付近から降りた所にあり、俗に雨乞いをする
りゅうじんかま い さん かま かぜ かま かま に かま か
竜神釜と言われている。三の釜は風の釜で、この釜は二の釜の下
ほう
方にあるが、ここも釜に降りる道はない。

ひ で つづ みず ふ そく むら ひとびと に かま あら
日照りが続き、水不足となった村の人々は、この二の釜を洗い、
そこ しず
底に沈めてあるご神体の青石をゴルフ場の上にある貴船神社 竜
おうしゃ むか あまご
王社にお迎えして雨乞いをした。すると、雨になったそうである。
みず すく かんのん ち く ひとびと いの に かま
水の少ない観音地区の人々の祈りがこもっている二の釜である。

だい じ てん りゅうじんがま
わがまち大辞典・・・ 竜神釜

ふるさと創作民話

三宅村の「竜王さん」

企画編集 かのん村探検隊

恵木 文江 岡本 啓子 斉藤 純一

貞廣 昌見 清水 正光 松本 共榮

発行 広島市佐伯区役所

(財)広島市未来都市創造財団 坪井公民館

広島市佐伯区坪井二丁目三二番一〇号

電話 〇八二―九二一―〇八一二

平成二四年(二〇一二年)十一月三十日